

【原の《技術者一口メモ》〔03〕】

明治を牽引した密航者たち－五代友厚と留学生たち－

第3回の《技術者一口メモ》は、前回の続きとして「明治を牽引した密航者たち－五代友厚と留学生たち－」と題して、薩摩の五代友厚たちの命をかけた密航劇企ての様相と、帰国後の近代日本の黎明期に産業界、政界等の各分野で明治の近代化をリードしていった彼らの活躍について紹介する。

【I】五代友厚(1836～1885)」と薩摩留学生

① 五代才助の上申書と薩摩留学生

幕末の最初の密航者を出した長州藩に遅れること2年、1865年(慶応元年)3月に「われらこそ日本最初の欧州留学生なり」と胸を張り、薩摩藩の若者14名が現在の串木野市羽島浦からイギリスをめざして船出した。その旗振り役を務め率先引率したのが、開明的思想と卓越した商才で知られる当時若干32才の五代才助(友厚)である。

薩英戦争において寺島宗則とともにイギリス海軍に捕縛された五代は、幕府や攘夷派等から逃れるために長崎に潜伏していた折りにトーマス・グラバーと懇意となり、世界の最新情勢を知り危機感を感じるとともに渡航の意を固めた。

1864年(元治元年)6月に自藩の薩摩藩に対して、開国に伴う外国貿易による富国強兵策の具体について「五代才助上申書」をなるものを提出している。そこでは、先ずは、米・海産物の輸出で得た利益にて精糖機械を購入しその利益で留学生を派遣、また軍備品や紡績機械の購入、さらには産業革命の技術を学ぶこと等にも細かく言及している。

五代は、この上申書に英仏両国へ留学人数16名と通訳1名、また人選についても詳しく述べており、早くも翌年には通訳を含む五代他の引率者5名と最終的には14名の欧州留学生が派遣された。彼の行動力には目を見張るとともにその迅速さに頷けるところである。つまり、五代らの密航挙行の9年前の1857年(安政4年)には、既に島津斉彬がイギリス、アメリカ、フランスの三国へ順次留学させるという構想を固めていたこともこの欧州留学生派遣が早急に決まったこと、また当時の薩摩藩の財力が豊かであったこと、そして上申書提出の前年に長州藩の井上聞多、伊藤俊輔らのイギリス密航が決行されたことに刺激を受けたことにも起因すると推察する。さらに、五代と知己であった家老の小松帯刀や大久保一蔵(利通)の尽力と島津久光の理解もあったようである。

いずれにしても五代の卓越した先覚性と指導力そして次に述べる彼の立てた綿密な密航計画の賜と思われる。

② 密航の手はずとロンドン到着まで

当時は各藩が留学生等を派遣することは国禁であったので、幕府の目を欺くために全員が変名を用い、行き先も奄美大島等の藩内の島々とし、目的も「出張守衛」つまり警備活

動のためであるとした。さらに一行が長崎から乗船すると幕吏の知る所なることを警戒して、グラバーから差し廻された香港行きの汽船を薩摩串木野羽島に回航させて一行を搭乗させている。

1865年(慶応元年)3月22日に羽島を出航し、途中香港にてイギリスの汽船会社の大型客船に乗り換え、シンガポールを経てボンベイで二度目の乗り換えをしている。その後、スエズ、地中海を経て5月28日にイギリス・サザンプトンに着港、即ロンドンに到着したのは、羽島浦を出てから66日後のことである。

五代と留学生がロンドンに到着後間もなく、先の薩摩の密航留学生の山尾庸三ら三人が彼らのアパートに面会に訪れている。

ところで、当時のスエズ運河は工事中(工事開始から七年目)であり、うち五代ら七人は猛暑の中をラクダの背に揺られ工事現場に向かい、蒸気機関を用いた浚渫船や掘削機による土木工事の規模の大きさに目を見張ったとある。さらにスエズから地中海に面したアレキサンドリア迄は、イギリスが1858年に完成させた全長約420kmの鉄道を使って移動した。

一行が初めて乗った蒸気機関車は一時間に17里(約68km)も走ると聞いて、市来勘十郎は「その早きこと疾風の如し」と書いている。



図-1 五代らの渡欧出発図

③ 留学生の選抜とその後の活躍

(長谷川貞信画「五代友厚伝」宮本又次著より)

派遣留学生の選抜は、家柄・年齢・思想を考えて、門閥から5名、薩摩藩の洋学所である開成所の13歳から31歳までの学生12名が厳選されたが、数人の辞退者が出るなどの紆余曲折を経て、最終的には14名の留学生と五代たち薩摩藩幹部と随員併せて19名となる。各留学生は、英国軍事学の基礎とも言える歴史・科学・数学などを学び、それぞれが海軍測量術、海軍機械術、陸軍学術、文学、医学、化学を専攻したが、約半数が一年後に帰国した。残った学生達は、学業に加えて欧州各地を訪問後、フランスに転学し、さらに1867年夏にアメリカに渡っている。

帰国後、内務省他で重責を務め帝国博物館初代館長となった町田民部、岩倉視察団に参加帰国後に開成学校長などを務めた畠山丈之助、英仏代理公使を務めた鮫島尚信、岩倉使節団に後発合流後に米国大使を務めた吉田己次、日本人初の米国海軍兵学校を卒業し帰国後、海軍一筋に進み海軍兵学校長を務めた市来勘十郎、そして最も名を残したのは留学時19歳の森金之丞、後の第一次伊藤内閣(1885)で初代文部大臣となる森有礼(1847~1889)などがいる。

いずれにしても「五代才助上申書」を提出して、自ら率先垂範して欧州にて精力的活動をした五代友厚の気概と志を超える者はいなかったと推察する。

④ 五代才助(友厚)(1836~1885)の前半期

五代友厚は、1836年(天保元年)に現在の鹿児島市長田町にて、薩摩藩儒臣・五代秀堯の次男として生まれる。幼名を徳助、通称は才助、後に友厚と名乗る。父秀堯は藩主島津斉彬の左右に侍し信任厚い家臣であり、「才助」は藩主斉彬によって命名されたとある。

1854年(安政元年)、二十歳にしてはじめて出仕して藩の郡方書役となり1857(安政4年)に、幕府の長崎海軍伝習生としてオランダ士官から航海術を学ぶ。

この五代友厚の約10年の長崎滞在時代では、海軍伝習所での幕臣の勝麟太郎(海舟)(1823~1899)や榎本釜次郎(武揚)(1836~1908)に始まり、1862年には上海で高杉晋作と出会い高杉から聞いた吉田松陰の教えである「草莽崛起」に意気投合している。また大久保、西郷はもとより長州の桂小五郎、井上聞多、伊藤俊介、土佐の坂本龍馬ら多数の志士と交わり開国論者「薩摩の五代」の名は志士間に著聞したとのことである。また、先の欧州視察ではブリュッセルにてベルギー生まれの国籍・フランス人のコント・ド・モンブランと懇意となり、ベルギーとの合弁商社設立に向けての活動、さらに万国博覧会出品の諸事務をモンブランに託している。また五代は滞欧中に我が国の文明を促進する方法として建言18ヶ条を藩主に郵送し、イギリスでは綿紡機、兵器の購入にもあたっている。



写真-2 五代友厚

帰国後、幕臣を経て明治新政府に仕えるのも束の間、明治2年には『俺の政府でやることは終えた』と小松帯刀、大久保に官を辞すことを伝え、大阪を

「東洋のマンチェスターに」との夢を抱き、実業家・技術者・文人として卓越した才能を開花させていく。

ちなみに、渋沢栄一が五代と同様に幕臣から維新政府に仕えた後、官を辞したのは五代より遅れること4年である。

士魂商才を発揮しての彼の数々の偉業は、今年のNHK大河ドラマに委ねるとするが、五代と渋沢の出会いのシーンを楽しみにしたい。



写真-3 欧州での五代友厚
(光世証券前像)

⑤ 五代友厚(1836~1885)の実業家・技術者・文人としての偉業

五代が名を才助から友厚に改めたのは明治3年頃とのことで、59才の生涯のうち友厚と名乗ったのは彼の後半生の約15年間である。

五代の行動・業績は、「東の渋沢、西の五代」と併置して比較対照して論じられているが、本稿では紙面の都合上の五代の主たる業績のみを年代順に列挙するにとどめる。

- 1868年：大阪府判事に任じられ府政を担当、政府に大阪造幣局の設置を進言
1869年：大阪通商会社、為替会社設立に尽力
1870年：五代の要請で本木昌造が大阪活版所を創立。日本初の英和辞書を印刷
1871年：造幣寮(現・大阪造幣局)の竣工、
1873年：鉱山開発の拠点として会社組織としての弘成館をつくり鉱山王となる
1876年：朝陽館(染料の藍の製造工場)を設立
1878年：大阪株式取引所(現・大阪取引所)を設立、大阪商法会議所(現・大阪商工会議所)を設立し初代会頭に就任
1879年：大阪商業講習所(現・大阪市立大学)を創設
1881年：大阪青銅会社(住友金属工業)を設立
1885年：東京の別荘で死去、大阪で葬儀

【Ⅱ】五代友厚の名言

五代友厚の言葉には、目的意識の重要性や人との接し方、仕事への姿勢など、現代にも通ずる多くの名言があるようである。ここでは、2名言を紹介する。



写真-4 五代友厚像(大阪取引所前)

「地位か名誉か金か いや大切なのは目的だ」

「自分が嫌えば 相手もまた自分を嫌う

気の進まない人こそ 積極的に交際してください」

【参考文献】

1. 「五代友厚伝」宮本又次著、有斐閣1981.1
2. 「明治を作った密航者たち」熊田忠雄著、祥伝社新書2016.2
3. 「五代友厚 士魂商才」佐江衆一著、角川春樹事務所

以 上

2021年04月作 明治の偉人たちに学ぶ“気概”と“志”
特別上級土木技術者 原 稔明